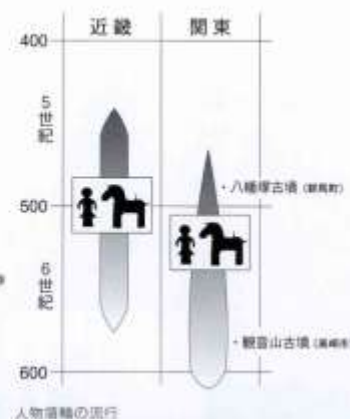


I 八幡塚古墳なくして「埴輪」は語れず



復元整備された保田八幡塚古墳

●保田八幡塚古墳とはどんな古墳か？
保田八幡塚古墳は、群馬県の西端、榛名山の東南の麓にある大型前方後円墳。五世紀後半から六世紀初めにかけ築かれた三つの前方後円墳からなる保田八幡塚古墳群のひとつである。保田八幡塚古墳群は、豪族居館三ツ寺遺跡を拠点にこの地域を治めた、東日本でも有数の豪族たちの墓所なのである。
八幡塚古墳は五世紀末の築造と考えられる。全長九六mの墳丘は、内堀・外堀・外周溝によって三重に囲まれ、全長一八八mの墓域を誇る。中心の埋葬施設は巨大な舟形石棺で、墓域には推定六〇〇本の円筒埴輪や、一〇〇体を越える人物・動物埴輪が立て並べられていた。

●八幡塚古墳の埴輪は東国埴輪様式のバイオニア

人物・動物埴輪群像は、五世紀中頃の近畿地方で出現し、東日本に波及する。近畿地方では、六世紀後半になると埴輪は衰微するが、逆に関東地方において独特な発達を遂げる。そして六世紀の終末頃には衰退する。
八幡塚古墳を含む保田八幡塚古墳群の埴輪群像（五世紀後半）は、関東地方では古い段階のものである。関東の埴輪群像のスタイルは、五世紀後半頃、群馬県保田八幡塚古墳群、埼玉縣埼玉稲荷山古墳、茨城県三味塚古墳などを築いた関東有数の大首長によって整備が図られたものであろう。これらの中で、埴輪群像の配列がしっかりとわがわがっているのは、八幡塚古墳だけである。

コラム1

Colum

八幡塚古墳の形象埴輪配列

八幡塚古墳では、古墳内のいろいろな場所に形象埴輪（人・動物・器物・家）が立てられた。その数は100体以上。形象埴輪は、立てられた場所ごとにちがう意味をもっていたと考えられる。

①外堀上の造形人物埴輪

古墳の一番外側（外堀）に、造形人物埴輪（頭を構え、肩あししを構えた人物）が立てられていたことが周辺の調査で分かった。その数10体以上。外堀からやってくる邪悪なもののから古墳を守るために並べられたと考えられる。

②中堀の方形埴輪

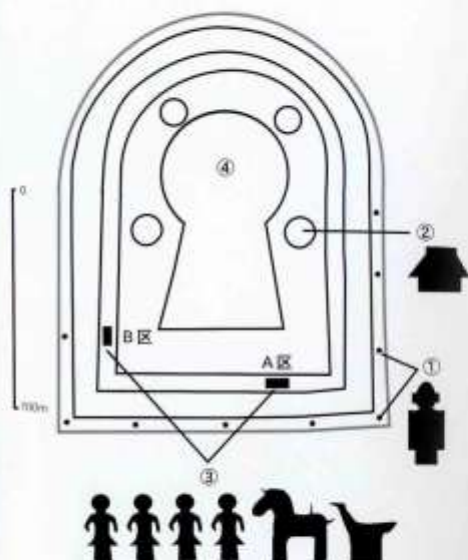
内堀のなかにある中堀には方形埴輪が立てられた。

③内堀上の人物・動物埴輪群像

内堀と外堀の間の堀の上には、人・動物埴輪の群像が並べられた（A区・B区）見つかった。残りの広いA区には50体以上の多数の埴輪が配置された。今回の展示では、この群像の意味を読み解いてゆく。

④埴輪群像の埴輪（推定）

はっきりとは分かっていないが、他の古墳の事例から八幡塚古墳の頂上にも方形埴輪や造形人物埴輪が並べられたことであろう。死者の姿を再現し、守り、蘇るために置かれたと考えられる。



八幡塚古墳の形象埴輪配列

●埴輪研究にはなにが大切な

人物・動物埴輪は、本来「群像」として古墳に並べられた。埴輪群像は、当時の人々の死生観にもとづき、ある意図や物語性をもって計画的に造形されたものである。しかし、その意味は未だはっきりと分かっていない。埴輪の謎を解くためには、まず群像としての並び方の規則（配列状態）を明らかにしなければならない。

①どのような種類（人・動物・器物・家）があるか。

②どのような職掌（役割）がみられるか。

③どのような服装で何を持っているか。

④どんな仕立をしているか。

⑤各々がどのような向きで、どんな関係性で置かれているのか。

人物埴輪が出土する古墳は数多い。しかし、右のような条件を満たす例は実に少ないのである。八幡塚古墳の埴輪は、わが国の調査例のなかで、突出した数の多さ、出土位置の明確さにおいて、最も優れた資料の一つである。八幡塚古墳なくして「埴輪群像」を語ることはできないのだ。
しかし、七〇年前に出土した八幡塚古墳の埴輪は、時代の波にはらうられ、ある物は行方不明となり、ある物は記録を失い、その実態は近年まで不明確であった。この展示では、その実態を示し、群像配列のあり方を推定していくことにしたい。

